

地方局の経費と 増す可し

地方官の經費不足の爲め事務の滞滯を免れかねば寧々府縣知事の懇訴する所にして中央政府も其事情を察せざるには非ざれども財政困難なりとて容易に聞入れず漸く三十一年度の豫算に於て九十八萬圓を増したれども不幸にして議會開議の爲め其目的を達する能はず依て目下上京中の地方官は是非とも今度の議會に要求せられたしと當局者に迫り居れりと云ふ我輩は地方官の要求通り三百萬圓を増して至當なるか將た前内閣の豫算の如く百萬圓にて足る可さか細目に至ては今始く論ぜざれども兎々角も經費増加の急要を認むるものなり近來各府縣の事務次第に繁多なるは寧々可らざる事實にして例へば職役の爲めに賞勵年金恩給扶助料に関する事務を増し軍備擴張の爲めに徵兵事務を増し普通教育及び實業教育の普及發達を計るが爲めに教育事務を増し鐵道敷設の盛なるが爲めに土地水面の處分に關する事務を増し軍備擴張の爲めに徵兵事務を増し商業會議所、取引所に關する事務を増し衛生事務を増し統計報告事務を増す等一として増さるるものなし今數字を以て之を示さんに或る縣の如きは明治二十一年度の取扱件數十一萬なりしに三十九萬餘圓なりしが當年度には三百四十九萬餘圓なりしものが當年度には三百十八萬餘圓となり其間に三十萬圓を減したり體て當時二十五萬圓の平均なりし判任官俸給も今は十八圓五十錢と爲り日當にすれば僅に六十錢餘に過ぎず兩水物價は次第に驟貴して錢の價は殆んど半減したる其上に耕種額は却て減じたりと云ふ困難の情想よ可し大工左官雇根園石工の如きは日に七八十錢より一圓内外の賃銀を取り車夫馬丁の輩にても五六十錢を得べし官吏とて別に貴き者には非されどもマサカに半天雇ひにては出勤するを得ず少なけれども人材を得るみると能はざるは勿論なり有用の人物は次第に避け出すと共に漸に適任者を雇ふみど難儀も亦忍久可しとするも事務の濫濫は忍み可らず給料人の報勵が車夫馬丁と同様にして大工左官に若かずとは明治年代の奇觀と云ふ可し奇も可なり官吏諸々の難鬼も尙も羽織を着し體を擧て公共の事務を取扱ふ共にして職務は唯縮紹凡庸たる可きのみ假合ひ凡庸にて其數多ければ尚ほ可なりと雖も其れさへ不足を免れず現に府縣の定員は七千人なれども其定員を充す能はずして現在の人員は六千四百二十人に過ぎず且つ近來工農の發達に連れ文書監督する爲め各府縣廳に於ても技術技手を置かざるを得ざれども何分にも其俸給なきが故に他の官吏の俸給と融通して僅に一時の窮を免ぐと云ふ始末にして固より十分の人を雇ふみると能はざれば爲めに開令の不補合を免れる其次第は例へば人民が工場と起して無門渠開など事件ければ之を検査せよと傳されども或は真見らす成は難性者なくして思ふ檢査を左ればとて何日までも開令を妨ぐ可らずにも非されば事件を検査もせずして警に認許する能どもなきに非ずと云ふ斯の如くにして官吏の數は増すみると能は

大日本帝國第一軍團にて元帥府を置く
翌日を以て小松山、山縣、大山、西郷
れも元帥の稱號を賜はりて元帥府に上る
純粹の大將は陸軍にて野津、海軍にて
み左れば大將よりも元帥の方却て空
も珍らしきふとなれば定めて引極め
ならんと想ひたりしに頃日は、一匁書
せも豫想に違はず大將の新任一件は
陛下親しく御取調べ在らせらるゝも
からず發表せらるゝならんと云ふ

去月十九日勅令第五號を以て元帥府を置かるるふどとなり其翌日を以て小機官、山縣、大山、西郷の陸海軍大將は就れも元帥の稱號を賜はりて元帥府に列したるにては總督の大將は陸軍にて野津、南軍にて樺山の兩大將のみ左れば大將よりも元帥の方却て多く斯る例は海外にも珍らしきふとなれば定めて引續き新任大將の出づるならんと思ひたりしに頃日は一向音沙汰なき有様なれども豫想に違はず大將の新任一件は目下御手許に於て陛下親しく御取調べ在らせらるゝやに洩れ承れば遠からず發表せらるゝならんと云ふ

○犯罪の美術（廿二）

せる内外貿易水産物課本はとくに陳列済の趣報道せる
向も有りしが硝子瓶買入等の爲め大に手間取り斯く此
程開場したるよし其點數總計七百八十二點内外製造に
係るもの三百三點外國產に係るもの四百七十九點其類
類は魚貝乾臘海藻等にして何れも上等のもののみ
を選み且つ々産地價格等を明記し彼我對照して研究
するに便ならしむ水産製造者並に貿易者は熟覽して益
する所あるべし

茲に洛陽館の三番室に住まへるは、村瀬とき子。また仙遊とかに勧めし、高等官何某の未亡人と云へり。未亡人に二人の娘子あり、娘はつゆ子と云ひて齡二十二、妹は十六にしてすみ子と呼々。つゆ子のあやかにして氣高き姿は、之を譽ふるに勤なく、晉て當代の書家と許されたる、秦日業鏡が、職を受けて其姿を寫すに當り、「娘の三十二相は、見て標準の外に逸す。而も尚ほ絶に、高潔の氣と、既治の色をたもつ。天力にして始めて之を作るべし、極劣の筆いかでか之を描かん。」常にして鑒なき、一片の面影は、甚に其美貌の貌を傳ふるのみにして、眞實美貌の美を存する能はず。眞子のすがたは大凡に察しのべし。此に比其言葉の、強ひらるゝによりて、遂に造りたるもの、即ち彼の笑いの室に止むる、一軒の袖構なら。此書事の言葉にて、はくば解せんとして、一聲びは遠を擱ちたり。左れをも傳ふるのみにして、眞實美貌の美を存する能はず。眞子のすがたは大凡に察しのべし。此に比其言葉の、

○桂陸軍大臣は昨日陸軍參馬監校へ赴き視察する所ありし由
が多分明日は歸京するならんと云ふ
後一時四十分新橋發の汽車にて大磯へ赴きたる由なり
伊藤總理の大磯行 伊藤總理は一昨十一日午
後九時三十分に大磯にて船に上り、次に茅ヶ崎にて下車し、
そこで船に乗り、次に茅ヶ崎内務大臣の所管に屬するゐ
ところより、從て北境、奥田、高橋、平山、號満等の次官
若くは書記官長を経て遂に松岡内務次官の下に支配さ
るゝに至りたるものなればなりと

○門野氏招待會(大阪) 九州鹿児島同窓會に隨
みなる門野氏之連氏は福京の途まる七日を以て大阪に
着したるを以て在阪慶應義塾同窓會氏は去る九日午後
第六時より氏を平野町坪井橋に招待して懇話會を開き
席上門野氏は慶應義塾事改更の趣旨及び基本金募集
の事を述べ神戸より來會せる村上定氏は神戸に於ける
基本募集の情況を述べ高木喜一郎氏も亦一場の演説を
爲し終り基本金募集の方法に付關議する所わりて和

諸氏なりと云ふ 門野 鶴之進 高木 喜一郎 小坂 正一郎 大崎 稲太郎 鷗 定次郎 松本 道 伊藤 温 江南 舒夫 山邊 丈夫 村上 定 深井 万吉 花に洛陽館の三番室に住まへるは、村瀬とお子、もと仙穂とかに勤めし、高等官何某の未亡人と云へり。末亡人に二人の娘子あり、娘はつゆ子と云ひて齡二十一、妹は十六にしてすみ子と呼ぶ。つゆ子のあでやかにして氣高き姿は、之を譽ふるに物なく、昔て當代の畫家と許されたる、春日翠鶴が、譽を受けて其姿を寫すに當り、「娘の三十二相は、凡て標準の外に逸す。而も尚ほ麗に、高潔の氣と、既治の色をもつ。天力にして始めて之を作るべし、揮毫の筆いかでか之を描かん。」 帝にして鑒なき、一片の翰林は、徒に其美醜の貌を傳ふるのみにして、眞正美醜の美を存する能はず。眞子のすがたは大凡て察しつべし。此は其言葉の、	外山 俊造 石川 信 木下 政次郎 永嶋 米治 甲谷 長三郎 浅井 得次郎 田嶋 久太郎 西橋 恒三 小松 恒太郎 横崎 健吉 佐々木勇太郎 阿部 房次郎 伊藤 錦一郎 福原 栄太郎 根尾 久男 芳賀 順吉 村田 彰
○犯罪の美術 (廿二)	農商務省商標陳列館に到着せる内外貿易水産物課本はとくに關内地の趣報道せる向も有りしが、硝子瓶買入等の爲め大に手間取り漸く此程開場したるよし其點數總計七百八十二點内外關税に係るもの三百三點、外國產に保るもの四百七十九點、其種類は魚貝、乾臘、海藻等にして何れも上等のもののみを選み且つ一々产地價格等を明記し、彼我對照して研究するに便ならしむ。水産製造者並に貿易者は熟覽して鑑する所あるべし。
趙峰 謹	○水產物見本陳列